



視点2

よりよい環境となる環境の中で育つ

笹川加奈子

(こども園園長)

縁あって出会った子どもたちにとって、わが園は「ホーム」であってほしいと願っています。安心して暮らせる場所、安心できる大人、ここなら何をしてもいい、この人たちなら話を聞いてくれる、また戻ってこようと思える環境でありたいと。

そうあるために、例えば、近隣の小学校と連携を取り、学校公開等の行事に参加するなど、可能な限り卒園児の成長を見守るようにしています。おかげさまで、卒園児が体験学習に來たり、近況を伝えに來てくれたり、また、保護者からの相談にのる機会があるなど、卒園してもつながっていることを実感できる場面が少なからずあります。

今でもつながりを実感できる子どもや家族の当時

を振り返ると、よく遊んだこと、よく話したこと、保護者と連携が取れていたことが思い出されます。中には、あまりのやんちゃぶりに、何度も何度もこちらも真剣になって向き合った子どもいて、当時「ささ先生コワイ」なんて言っていた子どもが、「昔よく怒られたなー」と懐かしんでくれることもあり。学校で何か課題が見つかったと、「園長先生に言ってくるよ」と言われている卒園児もいるようです。このように保育園のころの体験が子どもと家庭にとって「こんなこともあった」と思い出せ、懐かしむことのできるような関係が築けることは、子どもの育ちにとっての利益の一つだと考えています。

私たちの園では、「主体性を持って対話できる子ども

笹川加奈子（ささがわかなこ）

社会福祉法人新栄会 しんえい子ども園もくもく園長。
元中学校を改装した子ども園。広い園舎や庭で、自分で
考え、遊び、生活できる子どもを育てたいと奮闘中です。

も——自ら考え行動し、かかわる人との相違を確
認し合ったり互いの思いを調和し合うことができる
子ども」という保育目標を掲げ、そのための配慮を
通して子ども最善の利益を守りたいと考えていま
す。そのために園で実践していることが、先に述べ
たこととも重なりますが、保育者が子どもを受容し、
寄り添い、「大丈夫」という安心感を与えて、子ども
が自らの力を発揮しやすい環境にすることです。保
育者との信頼関係に基づいて、子ども自身が安心し
て自分の良いところも悪いところも出して自由に表
現する中で、自分自身の核になるもの、「自己」とい
うものを意識し形成していけるようになるのではな
いかと考えます。

幼児期は集団としての活動も増えてきますので、
ルールというものがあり、幼いながらも十分に他者
を意識しながら活動していきます。その上で自由が
あります。この「自由」というのは、自分の気持ち
を言える、聞いてもらえる、やりたいことができる、
受け入れてもらえるということを意味しています。

例えば友達が虫を捕っていたとします。「僕も虫捕
りしたいな」と思ったら、言葉で伝えられる環境か、
それを先生がどう受けとめるか、集団の中で一人の
主張をどう実現するか実現方法を考えます。しっか
り主張できた時の子どもの喜びは決して小さなもの
ではなく、たとえ虫が捕れなくても満足感を得るこ
とができます。このように小さな欲求を少しでも満
たせる環境であり得るか否かは、職員の努力にかか
っているのかもしれませんが、このような満足感を積
み重ねていける環境によつて自己を受容し肯定する
ことができるようになるため、それを保障すること
が子どもの利益となる環境づくりと言えるのではな
いかと考えています。

また、うまく集団に入れないお子さんの場合には、
その子の得意なこと、好きなことを見つけ、実践す
ることで自信をつけられるようになります。以前在園
した丁君（当時四歳児）は、年少者をかばうなど子
どもなりの正義感が感じられる一面もありましたが、
自我を強く主張し、友達との調和がうまくとれない

ことがありました。ある日、友達とのトラブルでふてくされていた時、集団に戻れなかったので、職員と一緒に誕生会会場を設定してもらうよう頼みました。ホールにイスを並べ、音響の準備。スピーカーのコードを延ばし、小さい子がコードで転ばないようにガムテープで固定します。誕生会が終わると当たり前のように撤収に飛んできました。これは保育者に促されたのではなく、自主的に片付けに来たのです。いつの間にか一人で音響準備ができるようになります、「丁君がいれば安心だね」と頼られるようになりました。その後、何かつまずいた時には、この成功体験を原動力として気持ちを切り替えられているようでした。就学後は毎日給食当番をすることで、クラスを自分の居場所と感じ、安定した日々を送ったようです。

一歳クラスのS君は、恥ずかしがりやで初めての環境にはちよっぴり後ずさりするタイプですが、幼児クラスの取り組みには興味津々。クラスのお友達がお部屋に帰っても、お兄さんたちの姿を眺めている

ます。大人都合でいったら抱きかかえて部屋に連れて帰るところですが、意味があつて残っているS君です。気にかけることができる職員がいれば気の済むまでお兄さんたちを眺めることができます。しばらくして「お兄さんたち見てたの？」と声を掛けると、「よいいんしてたよ。はやかっ」と教えてくれました。その後、満足したS君は「ご飯食べに行こうか」の声掛けに、「おなかすいたな」と素直に部屋に入っていました。ほんのひと時の思いを実現してあげることでの後の生活を気持ちよく過ごすことができるのだと思います。

時には登園の際、保護者がぐずる子どもに当たってしまふようなケースがあります。そのまま親子でいて良いことはないと感じた時は親子分離。保護者には仕事に行ってもらい、どんなに泣こうが暴れようが、その子のそのままを受け入れ、付き合います。すぐ泣き止むこともあれば半日がかりのこともあります。子どもは、お迎えのころには泣いていたことを忘れていきます。しかし保護者のほうは、一日中、

朝の後ろめたさを引きずったままのこともあるので、お迎えの際には保護者の気持ちが消滅できるよう、お子さんを引き渡す前に、朝の様子を伝え、安心してもらいます。そして、これからも同様なことがあつたとしても必ず受けとめ、責任を持つので安心して登園してくださいとお話しします。何度も同じ場面があると、子どものほうもママが安心しておいでいくんだから大丈夫と思えるようになるよう、保護者との信頼関係が子どもの安心できる環境、利益につながっていることを感じています。

当園では明確に「子どもの最善の利益」という言葉で評価することはありませんが、保育や子どもの成長を振り返る中で、誰のための保育なのか、その時の配慮がその後の成長につながるのか、大人側の思いが強過ぎたり、大人の都合になっていないかということをいつも考えます。「子どもにとって」という認識が欠けないように保育し、その意味を保護者にも伝え、理解してもらうことが、子どもが利益を得る環境ととらえています。

ところで、最近気になるのは、「もっと早く保育を経験してもよかったのでは？」と思うケースです。親の愛情の中で育てられることはもちろん望ましいことですが、家庭で親と子だけで過ごすことで、子どもには親の感覚や価値観のみが伝わり、多様な価値観に接することや体験が不十分になり、そのことによる成長のひずみを感じられるからです。保育施設で親以外の人とかわかること、親とは違う価値観もあると体験することも、成長に欠かせないものだと感じています。家庭第一ではありますが、家庭以外の場所や人だとしても、子どもの心地良いよりどころとなる場所や人が、子どもの心身の成長を支えることができるのではないのでしょうか。

乳幼児期に人への信頼をベースに積み重ねた生活や遊びの経験は、その後の人生をその子らしく力強く生きるための糧となります。シアウエーでこそ頑張れるような力が備わる豊かな乳幼児期となるように、日々の保育を行っています。